

小越和栄 (著)

消化器内視鏡リスクマネジメント

多田正大

(多田消化器クリニック)

繰り返される医療事故が社会的にも問題視され始めてから久しい。医療従事者が原因究明と事故防止に努めることは責務である。まして合併症や偶発症の危険性が少ない消化器内視鏡診療において、普段からリスクマネジメントの在り方を考えておくことは重要である。その精神を理解することは正しい診断と安全な治療に直結し、偶発症発生の予防や、不幸にして事故が発生したときには患者の被害を最小限にとどめることにつながる。内視鏡医やコメディカルはリスクマネジメントを知らずして診療に携わることはできないと断言しても過言ではない。

日本消化器内視鏡学会でも、各種委員会などにおいて安全な内視鏡診療の在り方に関する討論が繰り返され、必然的に様々なガイドラインが提案されてきた。本書の執筆者である小越和栄先生は常にこの方面の議論の中心にいる存在であり、さまざまな提案を行って

きた最大の功労者の1人である。小越先生は海外における内視鏡診療の現況と問題点を熟知し、わが国の医療水準と社会的ニーズなどの事情を考慮しながら、リスクマネジメントの概念の普及に尽力してきた先駆者である。私も学会リスクマネジメント委員会における報告書作成の場で小越先生の博学と篤い情熱を知り、教えられることが少なくなかった。

その小越先生が永年のテーマである消化器内視鏡診療におけるリスクマネジメントの基本を1冊の書籍としてまとめたことは意義深い。小越先生の主導する消毒法や循環動態に関する報告書は過去に学会誌にも記載されてきたし、総会の特別講演の場で先生の持論を拝聴する機会も幾度もあった。これらの内容を一冊の書籍にまとめていただいたことは、学会会員やコメディカルにとっても理解しやすく、ありがたいことである。

本書はガイドラインの目的と意

義、内視鏡診療に従事する者の基本的な心構え、実際の安全な内視鏡診療の基本、そしてガイドラインに沿うことができないケースでの対応の仕方など、内視鏡医療に必要なリスクマネジメントの精神と実践のすべてが記載されている。書籍のタイトルは堅苦しいが、誰が読んでも理解できる平易な文章であり、その精神は十分に共有できる。今日のわが国の内視鏡医療水準における重要な事項がすべて記述されているから、本書は参考書ではなく教科書、否、聖書と断言できる位置づけの書籍である。それだけに第一線の現場にいる内視鏡医はもとより、これから内視鏡を学ぶ研修医、内視鏡医療に従事するコメディカルに至るまで、すべての人に読んで欲しい貴重な書籍である。本書の内容を理解せずして、内視鏡医療を安全に行うことはできないと痛感する。

『医療崩壊』が取り沙汰されている昨今、医療の本質と構造を根幹から見直す機運が高まっている。それだけに内視鏡医療の在り方を考えるためにも、本書に記載されたリスクマネジメントの精神は重要である。

●B5/頁 144/2008 年/定価 4,200 円
(本体 4,000 円+税 5%)
[ISBN978-4-260-00604-0]
医学書院 刊